
魔王子復讐記

おかむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王子復讐記

【Nコード】

N5383Y

【作者名】

おかむ

【あらすじ】

魔王サタンが倒され存亡の危機に立たされた魔族。

正義と悪、魔族と人間、相反する二つが交じり合って混沌とした世界を舞台に魔族の再興と勇者への復讐を果たすべく、残された魔王子ルシファアの旅が今始まる！

深まる謎？真実の答え？分からない事だらけでも歴史は止まってくれない。

友との出会いと別れを繰り返し、果たしてルシファアは勇者への復讐を果たす事が出来るのか？

復讐系ファンタジー。

001（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「カンヘル。右前方、注意！」

「御意。」

ルシファアの言葉にカンヘルは応えると、拳を前に突き出して突進してきた衛兵を弾き飛ばす。

「ルシファア様っ。」

後方より突進してきた長槍兵を素早い一撃で牽制したニヤルは再び距離を取って、周囲を警戒する。

ここは ゴルディアンゴルディアンの森。

かつては 古種ゴブリン族 の聖地として栄えた地はあるが、人間の前線支援基地があるために、周囲の廃墟とは違い、衛兵達が駐在していた。

「しかし、ここまで多いとは。」

「弱気だなんて珍しいにや。」

「なっ！？弱気などではない。」

カンヘルとニヤルのやり取りには反応せず、ルシファアは詠唱を破棄し右手を衛兵達に差し向ける。

同時に周囲を取り囲んでいた衛兵達が青白い炎に包まれた。

ポチャノボン は任意の対象を青白い炎で包む初級魔法だ。

断末魔の叫び声を上げて地面をのた打ち回る衛兵達を見ながら、ルシファアは背中の大剣を引き抜いた。

そして躊躇無く刃を突き立てていく。

叫び声は途絶え、次に鮮血が地面を赤黒く染め上げていく。

ルシファアが無尽蔵に思える程の魔力を有しているとはいえ、万が一の危機に備えて魔力を節約することは重要であった。

とは云ってもルシファア程の魔力をもってすれば初級魔法の一つや二つでは、その顔色一つ変える事さえあり得ないわけだが。

「前方より弓兵！」

「了解っ！」

「はいにやつ！」

それに万が一魔法が使用できない状況になったとしても、今のルシファーにはふたりの友がいる。

「防御結界 イーリス ツ！」

両の腕を前方へと向け構え、魔法結界を発動した鎧の戦士はカンヘル。

岩の体と温厚そうな眼差しを持つ大柄な男で、ルシファーとは旧知の仲である。

種族は 岩人族。

大柄な体躯で敵の攻撃を一手に引き受ける強固な防御能力を持ち、かつての戦場においては不沈要塞の異名を誇っていた。

「……遅いにゃ！」

そのカンヘルの防御結界で弾かれた矢を見て怯んだ弓兵達の間を、猫耳の少女が突く。

近接戦闘の備えを持たぬ弓兵達は仕方なくその手に持った弓を振りかぶるが、彼女は構えた刃で、駆け抜けざまに斬り捨てた。

黒い尻尾を風に漂わせる小柄な少女はニヤル。

ルシファーの事を様付けで呼ぶ彼女もまた、ルシファーの友人である。

種族は 猫耳族。

小柄な身体と素早い身のこなしを特徴とし、その動きは二足歩行が可能な魔族では地上最速とも云われる。

その二人の動きを見ていた、ルシファーは再びゆっくりと前進する。

ルシファーの種族は 魔人族。

魔族最高とも名高い魔力と明晰な頭脳を誇り、数多の大魔術師を輩出している。

中・遠距離戦闘では魔法、近接戦闘においては魔剣と呼ばれる魔力で強化した固有の武器を持って敵を殲滅する完全な魔法攻撃特化

種族だ。

だが魔法攻撃に特化した種族の宿命として物理防御力は心許無い。カンヘルの頼りがいのある岩の皮膚はともかくとして、ニヤルのような素早い身のこなしもルシファーには出来ない。

かと云ってルシファーがカンヘルのような全身鎧を着けることは無い。

魔人族の辞書に「防御」の言葉は無い。

数多の戦場における彼らの先祖からの教訓は「殺られる前に殺れ」だ。

だからと云って物理防御力に乏しいルシファーが戦場で孤立する事は望ましくない。

いつ敵の奇襲を受けるか分からない状況を考えると、背後からの奇襲を警戒しながらカンヘルやニヤルと一定の距離を離れずにいる方が得策である。

勿論この ゴルディアン の森 はそこまで重要性の高い前線支援基地があるわけではない。

現れる衛兵達もルシファーに奇襲を加える程の手だれや高度な魔法を駆使する魔法使いなどではない。

ルシファー達三人はそれぞれが一軍の将を務める程の高位の魔族だ。

尤も今やその一軍すら存在しないのが魔族の現状ではあるが。

いくらルシファーの物理防御力が低いとは云え、これだけ実力の差があるとそうそう奇襲を喰らうようなこともない。

そもそも、カンヘルは敵が多いと云うが、三十程度の一般兵など、三人の内誰だって、一人で殲滅する事が出来る程度の数である。

(とはいえ、この程度の兵だからだが。)

先ほどから、口では余裕を見せているカンヘルやニヤルだが、その表情はどこかこわばっている。

戦闘、そして殺傷というのは恐ろしいものだ。

いくら優れた肉体と能力を持っていて、圧倒的に有利に戦闘を進め

られるとはいえ、敵と対峙するのは恐怖と緊張感を伴う。

襲い来る兵士も、それを受け止めるのも、そしてそれを殺すのも、全て自分自身で為さねばならない。

前線でそれらに対処し、止めを刺すというのは、想像以上に精神力を要する。

それらを乗り越えるためには、場数を踏むしかないだろう、というのがルシファーの出した結論である。

「右方っ！」

「了解っ！」

焦りの表情で汗を滴らせながらも、ルシファーの声に素早く反応して、カンヘルは右腕を叩き付けた。

その一撃は、当たり前こそしないものの、長槍兵への牽制にはなったようだ。

身の丈ほどの長槍を構えた衛兵は、動揺とあからさまな敵意が入り混じった眼差しを向けながら、二歩程後退し距離をとった。

この一撃もそうであった。

ルシファー達は一軍の将を務める程高位の魔族だ。

本来であれば、こんな前線支援基地の衛兵程度の相手に攻撃を失敗するなど、考えられない。

こんな所にも、経験の不足が見て取れる。

身体と能力がいくら高位の戦士であっても、今はその力を十分に発揮出来ていない。

「マイシユテルンッ！」

それなら確実に敵を殲滅出来る術を選ぶべきだと考えたルシファーは、広範囲に効果のある魔法を詠唱した。

マイシユテルン は任意の対象の動きを鈍くする凍結系中級魔法だった。

周囲を囲んでいた衛兵達の身体の一部が氷漬けになる。

とはいえ、致命傷には至らない。

そもそも凍結系魔法は攻撃よりも妨害に向いている魔法が多く、

大きなダメージは与えられない物が多い。

その証拠に、ルシファアの放った魔法を喰らった衛兵達は動きこそ鈍ってはいるが、その敵意は確実にこちらに向いていた。

「さすが我が主。おりゃああああ！」

動きが鈍った衛兵達をカンヘルが両の腕を振り下ろし、地面に叩きつけていく。

「感謝するにや。ハアツ！」

残った敵もニヤルが素早い一撃で斬り捨てて行く。

倒れていく衛兵達の断末魔とは対照的な二人の明るい声が響く。

戦争の経験の無いルシファア達にとって、まだ難しい戦闘だがその能力差は明確だ。

その動きが鈍ったとあれば、あとは接近して、一撃を見舞わせるだけである。

「フンツ！これで十五人目。」

「こつちは十七人目にや。」

「ぬっ……やりますな、チビ猫殿！？」

「チビ猫って云うにやー！でくの坊っ！」

元来、暗い事を考える二人ではない。

温厚で忠義に厚くタフなカンヘルと、そのカンヘルを軽口と冗談で手玉にとるニヤルだ。

きっかけとちよつとした手助けがあれば、次々と衛兵達を倒し始める。

ルシファアの狙いは最初からこうだった部分にあった。

あとは二人が止めを刺し損ねた敵に、背負った大剣を突き立てていくだけでいい。

今相手にしている敵はルシファア自身が強力な攻撃魔法や大剣を開放して攻撃を加える必要はない。

考えて見ればなんというのではなく、それはこれまでの修行と教え通りの基本的な戦闘に違いなかった。

（しかし、どこまでこの力を使わずにいけるか。奴はこの程度の雑

兵とは格が違う。奴だけではなく、他も侮れない。」

ルシファアはそんなことを考える。

「ハッ！私の獲物だ！」

「あげないニヤ！」

戦場とは思えない楽しそうな声。

カンヘルもニヤルもルシファアが目的を果たすために行動を共にする旧知の友だ。

今まで厳しい修行をこなしてきた彼らならきっかけさえ掴めば、躊躇や戸惑いは消える。

「これで、最後ですか？」

カンヘルが両の腕で衛兵を地面に叩き付けて尋ねる。

ルシファアが考え事をしている間に戦闘は終結していたようだ。

ルシファアはその言葉に頷きながら、両手をカンヘルとニヤルに向ける。

「ああ。情報によればこの前線支援基地の兵員は五十四名。こいつで最後だ。」

ルシファアは詠唱を破棄し初級回復魔法 ヒルン を発動する。

カンヘルとニヤルは殆ど攻撃を受けていないが、念には念を入れた形だ。

「いっぱい倒したにや。」

ルシファア達は初陣に勝利した。

ルシファアは最初の戦場としてこの ゴルジディアンの森 の前線支援基地を選んで正解だったと思う。

たった数度の戦闘の中で、これ程格下の相手に対し幾度も攻撃を失敗した。

後半は完璧とも云える戦局の展開に成功したが、最初から中規模以上の拠点や基地を襲撃していたら戦況は変わっていたかもしれない。

幸い、陽はまだ高い。

「今日はここでキャンプにしよう。」

前線支援基地だけあって、ここで一夜を過ごすには充分すぎる備品や食料があった。

「ニヤルは一応周囲を警戒してくれ。カンヘルは寝床の準備。俺は料理を。」

「了解。」

「わーい！ルシファア様の手料理だにや！」

カンヘルは基地という名の木造の建屋に入り使えそうな寝具を探す。

ニヤルはルシファアの手料理に歓喜しながらも、身を低く構え周囲の警戒に当たる。

ルシファアは厨房を拝借しシチューを作る。

三人の旅は始まったばかりだが、なんにしろ彼らにとっては最初の勝利であった。

それは彼らの壮大な目的に比べれば小さな事に過ぎない。それでも今宵ばかりは楽しくありたいと願うのであった。

「ルシファア様ー、おいしいですよ。」

猫舌のニヤルは頬を赤らめ、シチューを冷ましながら頬張っていた。

「うぬ。さすが我が主。誰かさんとは大違いだ。」

大食漢のカンヘルは今宵も匙の勢いが止まらない。

「おい！そのでくの坊……その誰かさんとは誰のことにや！」

「心当たりがあると云うのなら、それで正解ですよ。」

「なんにやとー！貴様、レディーに向かつてにやんと失礼にや！」

「レディー？果てさて……どちら様の事でしょうか？」

「にやにやにやにやー！」

ルシファアは二人の応酬を横目にシチューを頬張っていた。そして思い出していた……。

あの夜の出来事を。

旅立ちと大いなる復讐を成し遂げる事を決意した夜の事を。

001（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

雷鳴が轟き、ガラスの割れた窓からは豪雨が降り付ける。

絢爛豪華な造りを施された王の間は雨風と激しい戦闘によって、見るも無残な姿へと変貌していた。

アーシラト高原、魔王城最上階、王の間。

そこは比類なき魔力とそれを有効に活用する天才的な頭脳をもつて、すべての魔族と束ねる王の中の王、大魔王サタンの社であった。十年前、ルシファアがまだ八歳の時の出来事である。

「嵐神バアル よ！その怒りをもって我らに勝利の輝きを！……

ラピムヘビヨン ッ！」

ラピムヘビヨン は任意の単体に雷撃を与える攻撃系の上級魔法である。

豊かな白い髭をその顎に蓄えた魔道士マフューは、嵐神バアルの庇護を付与され、さらに強化された一撃をサタンへと向ける。突如としてサタンの頭上に出現した雷撃は唸りを上げて空間を引き裂き、サタンに直撃する。

「ぐっ……。」

サタンはとつさに魔力を放出し、これを防ごうとする。

しかし防御結界ですらないただの魔力の放出で防げるほど、マフューの一撃は易しいものではない。

サタンの両腕は黒く焼け焦げ、皮膚の内側の筋肉を痛々しく露出していた。

それでも攻撃は止む事は無い。

「軍神アレス よ！我にその導きを授けたまえ！…… 英霊降臨ッ！」

英霊降臨 は契約した英霊の力を任意の物体に付与する上級魔法である。

全身鎧に身を包んだ戦士チェムは掲げた剣に 軍神アレスの力

を付与した。

軍神アレスの魔力を付与されたチエムの剣は神々しい光を放つ。

「サタン……覚悟しろ！うおおおお！」

チエムは掲げた剣を振りかぶりサタンに斬りかかる。

サタンも咄嗟に魔力を放出しその斬撃に対抗するが、チエムの剣が纏った軍神アレスの魔力はサタンの魔力を物ともせず破っていく。

魔力の刃はサタンに致命傷こそ負わせられないものの、一方的にサタンの身体を傷つけていく。

「くっ……嵐神バアルに軍神アレスとは……恥を知れ人間共！」

魔力を放出しチエムの剣を必死に受け止めるサタンは勇者を睨みつけ、そう叫んだ。

「黙れサタン。英霊は貴様ら魔族だけのものではない。よもや忘れたわけではあるまい？」

「勇者よ！貴様ら人間は、そうまでして魔族を討ち滅ぼさんと欲するか！？」

サタンが言葉を投げ交わした相手こそが人間世界の希望にして、魔族にとつての侵略者である勇者ニーシュ。

人間の身でありながら魔族の六王にも匹敵する魔力を有する天才であった。

「俺たち人間は弱い。悔しいが、こうでもしなければ貴様には勝てないっ！だが、覚えておけ……俺はお前達が行ってきた悪事を許さない。」

「何を訳の分からぬ事を！」

サタンとニーシュの言葉は噛み合わない。

魔族の頂点と人間の希望、それぞれに思惑と背負うものがある。

「幾千年もの間、我ら人間を狭く荒れた地に押し込めてきた罪を償うがいい！」

ニーシュの言葉にサタンは戸惑いを覚える。

（それは違うぞ……勇者。まさかこやつは何も知らないだけではないのか？）

今まで激しい戦闘を繰り広げてきた勇者一向と魔王サタン。

しかしサタンはその戦いのなかで初めて、一瞬の思考の鈍りを見せてしまう。

「サタンッ！とどめだっ！」

ニーシュは鞘から剣を抜くと天高く刃を掲げた。

「勇者ニーシュの名においてここに宣言する！ 精霊王バハムートよ、我が身体と血の盟約を交わし、その力を我が袂へと降臨したまえ！」

（ばかな！？）

サタンは驚愕した。

精霊王バハムート は英霊の頂点に君臨する四人の神々の一人であつた。

高位の魔族ですら数えるほどしかその庇護を受けることが出来ないと云われる精霊王から人間が庇護を受けるなど、考えられないことであつた。

突如、巨大な地鳴りとともに城内の灯火が大きく燃え盛った。

それは火の精霊王であるバハムートの降臨を示す合図であつた。

近くにいても感じられるほどの魔力がニーシュの構えた剣が紅く染めていく。

サタンほどの強者であつてもその魔力が自らの魔力を遥かに超えるものであることが容易に想像できた。

そしてサタンはその盟約を交わす機をニーシュに与えてしまったことに絶望した。

「サタン……貴様も分かっているだろう。精霊王の降臨は今この瞬間より、降臨した精霊王の力無くして成されない。」

サタンは勇者達を見縊っていた。

魔法の行使をここまで控え魔力の放出だけに留めてきたのは、土

壇場の最後の一手として精霊王の庇護を受けることを考えていたからであった。

「魔族最大の失敗は 精霊王バハムート の聖地を我が人間の地に残してきた事だ。今となつては貴様が 精霊王アーシラト の庇護を受けることすら出来ない。」

ニーシュの言葉にサタンは言葉を失う。

「返す言葉も無いか……。魔剣を持っていなかったのが運の尽きだったな。サタン……貴様の命脈もここまでだ！」

ニーシュは紅く輝く剣と構えるとサタンに斬りかかった。

「はああああああ！！！」

「ぐっ……。」

サタンは寸でのところで斬撃を交わそうとするが、膨大な魔力の刃はサタンの身体を容赦なく斬りつけた。

すると傷口から黒い炎が噴出す。

（これがバハムートの力が……。）

尚も容赦ない連撃が続く。

「はあ！てやつー！！！」

その一撃が振り下ろされる度にサタンの身体から黒い炎が上がる。

（くっ……もはや……これまでか。）

サタンの身体はもはや限界であった。

燃え盛る身体で必死に斬撃を回避しようとするサタンであったが、もはや勇者に勝つ術は残されていなかった。

（だが、これで終わりにはさせん！）

サタンは死を覚悟した。

そして死の対価にふさわしい、魔族の頂点たる自らにふさわしい選択肢を選ぶ。

意を決し相対するニーシュを前に魔力の放出を止める。

次の瞬間、ニーシュの一撃がサタンの腹部を貫く。

「うっ……。」

引き抜かれる刃。

腹部から大量の血液が損なわれ、傷口を黒い炎が覆う。

生死を賭けた戦いが幕を下ろした瞬間であった。

だが、それとは別の……サタンの戦いが幕を上げた瞬間であった。

(くっ……間に合うか……。)

止め処なく溢れ出る血と薄れゆく意識の中でサタンは最後の魔法を心の中で詠唱した。

残った魔力の全てを用いて、その詠唱を口にするをしなければならなかった。

詠唱の破棄はその魔力の量で可否が決まる。

今サタンが為そうとしている魔法は、彼以外の魔力をもつてして詠唱を破棄する事など出来なかった。

ニーシュに気づかれて対抗魔法を発動されることは許されない。

彼はその命脈が尽き果てる最後にその魔法を発動すべく、意識を集中していく。

その集中たるや王の間の背後の扉に潜む影の存在に気がつかない程であった。

ニーシュの一撃がサタンに突き立てられる四半刻前。

「坊ちやま……緊急事態です！落ち着いて話をお聞きください。」

アーシラト高原、魔王城最上階、後宮。

後宮は大魔王とその家族専用の居住空間であった。

そこに家族以外で立ち入る事が許されるのは、ごく一部の限られた執事だけである。

「うーん……トウイーニー？どうしたの？」

「坊ちやま、自体は一刻を争います。勇者一行が単身、王の間へと侵入しました。城の兵士は全滅、文官すら一人残らず殺される始末です。」

「!？」

トウイーニーは魔王城の後宮で魔王子付きのメイドを務めていた。
種族は 妖精族。

魔族随一と評される女性の美貌が有名な 妖精族 は、メイドや踊り子などとして貴族階級に好まれる。

トウイーニーはその 妖精族 の中でも絶世と呼ばれる美貌を持つて後宮勤めを勝ち取っていた。

そして魔法や勉学の才を持って魔王子の教育係まで務めていた。

「幸いサタン様が王の間で戦っておいでです。坊ちやまは一刻も早い脱出を。」

「父上が!？」

そしてトウイーニーが坊ちやまと呼ぶ少年こそ、大魔王サタンの息子にして次代の王の座を約束された才の持ち主である魔王子ルシファーであった。

当時まだ八歳であつたルシファーはあまりの出来事に動転する。

ベッドを素早く抜け出したルシファーはトウイーニーを無視して王の間へと走り出す。

「坊ちやま!?! いけません!」

トウイーニーもそれを止めるべくルシファーの後を追う。

「くっ……坊ちやま! 坊ちやま!」

後宮から王の間へはそう長くない距離であつた。

子供の足でも五分とかからない距離であつた。

ルシファーは王の間の扉へと手を伸ばす。

「坊ちやま!」

扉へと手が届く前にトウイーニーが追い着く。

「トウイーニー、離せ!」

「離しません!」

トウイーニーは断固たる意思を持つて扉の前に立ち塞がった。

「そこを……どけー! ツンララン ツ!」

我を忘れたルシファーは魔法の矛先をトウイーニーへと向ける。

ツンララン は任意の単体に氷の刃を向ける凍結系中級攻撃

魔法であつた。

鈍い音と共に氷の刃がトウイーニーの左目に突き刺さる。

トウイーニーは魔法の発動に気づきながら、それを避けようとしなかった。

「ぐっ……。」

彼女はルシファアの魔法を防げないほど無能でもなければ、ましてやそれをかわせないほど鈍くも無かつた。

自我を取り戻したルシファアは自らの行いに動揺した。

「あつ……ああ……。」

言葉を失い、がつくりと膝を落としたルシファアは頭を抱えた。

「……坊ちやま……どうか気を確かに。今最も重要なことは……坊ちやまの命です。」

その言葉はサタンが破れることを意味していた。

今眼前の扉を開け、助けに参ずる事は即ち死を意味する。

そしてルシファアの死は魔族の希望を喪失することを意味する。

トウイーニーは全てを理解した上で苦渋の決断を下し、それをルシファアに促したのだ。

「サタン様は……もう助かりません。ですが、最後のお姿だけでも見て参りましょう。その後は力ずくでもここを脱出していただきませう。」

左目を抑えながらトウイーニーはルシファアを諭した。

「トウイーニー……俺は……。」

「大丈夫です。私はこの程度の傷では死にませんよ。」

トウイーニーは血で染まる顔で笑ってみせた。

「ごめん……なさい。」

「いいんです。さあ、サタン様の最後のご勇姿をしかとその目に焼き付けてください。」

トウイーニーは厚い扉を中の者に悟られないよう慎重に少しだけ開いた。

そこからルシファアは目だけで王の間を見渡した。

（父上！？）

眼前に飛び込んできたのは黒い炎の中に身を包み、膝を着き頭を項垂れた父サタンの姿であった。

そしてその前に立つのは、見知らぬ人間の男……勇者ニーシュであった。

ニーシュは今まさに構えた剣でサタンの首を切り落とさんとする瞬間であった。

ルシファアは飛び出そうとする衝動を必死で抑えた。

「サタン……覚悟はいいか。」

「いいだろう。この首、貴様にくれてやる！だが忘れるな……死して尚、我魔王たることを……。」

「戯言を！死ねっ！」

ニーシュの一振りが振り下ろされるのと時を同じくして雷鳴が轟く。

「……！！」

サタンの最後の叫びは雷鳴に掻き消されルシファアには届かない。

（父上ッ！）

ルシファアは叫びたくなる衝動を抑え、その瞳をニーシュに向けた。

その顔を忘れぬために。

そして強くその心に刻み込んだ。

復讐を成し遂げる事を。

それを可能に出来るほど強くなることを。

睨み付けるようにニーシュを凝視するルシファアはある異変に気づく。

サタンの首を切り落としたニーシュがその場に倒れこんだ。

慌てて後方から、魔道士マフューが駆けてくる。

即座に回復魔法を詠唱を破棄し発動するが、ニーシュは動かない。

「ニーシュ！ニーシュ……！」

マフューの発動した回復魔法が効いていない様子であった。

「ルシファー様……参りましょう。これ以上は危険です。」

トウィーニーに諭され、名残を惜しみつつ後宮を後にした。

城を出た後、彼らは三日三晩、南方の アニユチラブマ山 を目指した。

その間の記憶をルシファーはあまり覚えていない。

気づいた頃には、 アニユチラブマ山 の麓の名前も無い町の近くの小屋にいた。

だがはつきりとしているのが、あの日父であり、魔族の王の中の王サタンが殺されたという事。

勇者ニーシュ、魔道士マフュー、戦士チエムを殺し復讐を成し遂げるという事。

そしてその事を アニユチラブマ山 の山中で固く誓ったという事。

彼はこの十年の間に強くなった。

それはかつての大魔王サタンにも匹敵するほどに。

だが彼の大きいなる復讐の旅路はまだ始まったばかりであった。

002（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「坊ちやま……お早うございます。もう、お目覚めでしょうか？」
扉一枚で隔てられた廊下からトウイーニーの声がする。

「ああ。もう起きてるよ。」

ルシファアはトウイーニーが起こしにくる半刻程前に目が覚めていた。

昔は部屋の中にまで押し入ってきて起こしにきていたトウイーニーも近頃は、部屋の前の扉越しに確認するだけになった。

惨劇が繰り広げられた夜から十年、決意を心に決めた夜から十年が過ぎ、ルシファアは十八歳の青年へと成長を遂げた。

背丈も百七十を裕に超え、幼かった声はますます低く、鋭くなった。

「朝食の準備が来ています。着替えがお済になりましたら、降りてきてくださいね。」

扉越しにトウイーニーはルシファアへ朝食を採ることを促す。

「ああ。すぐに行くよ。」

ルシファアがそう告げるとトウイーニーが階段を下っていく音がする。

寝巻きを脱ぎ捨てたルシファアはベッドの横に置かれた旅の支度を見下ろす。

（抜かりはないな。）

そう心の中で呟いて旅用の丈夫なパンツとシャツに袖を通す。

今日はルシファアと仲間達の旅立ちの日であった。

ルシファアにとっても、その友にとっても緊張の度合いに差こそあれど、あまり気分良い睡眠が送れたとは思えなかった。

それほどまでに彼らの旅の目的は困難を極め、そして何よりも壮大であった。

ルシファアは着替えを済ませ、部屋を出てリビングへと降りた。

「お早う。トウイーニー。」

「お早うございます。坊ちやま。」

いつもと変わらないトウイーニー手製の朝食が食卓に並んでいた。彼女が朝早くから焼き上げたパン、朝市に並んだ野菜のサラダ、新鮮なミルク。

最近でこそ旅に備え自炊を学び始めたルシファーであるが、朝は決まってトウイーニーの作る朝食を二人で食べる。

それがこの十年間変わらない二人のルールであった。

席に着いたルシファーにトウイーニーは温めたミルクを差し出す。

「ありがとうございます。」

「いえ。それではいただきますようか。」

トウイーニーも席に着きいつもと変わらない二人の朝食が始まる。違うのはそれも今日で最後であるという事であった。

「やっぱり、行かれてしまうのですね……。」

トウイーニーはミルクの入ったカップを置くと寂しそうな表情を浮かべた。

「ああ。元より決めた事。」

ルシファーが勇者への復讐を決めた夜からちょうど十年。

ルシファーは自らの心に固く誓った決意の道を逸れることなく歩んできた。

「そうですね……寂しくなりますね。」

左目に眼帯を付けた 妖精族 のメイドの美しさは十年の年月程度では変えられない。

大抵の男であれば、そんな彼女の願いを反故になどはしないだろう。

それでもルシファーの決意は固かった。

「済まないな……トウイーニー。必ず目的を果たして帰ってくる。」

ルシファーは本心から出た言葉を口にする。

しかしそれはあくまで本心であって、根拠の無い願望に過ぎなかった。

実際には帰ってこれる保障も可能性も無いに等しかった。

「勇者は強いです。今の坊ちやまでも……。」

トウイーニーが口を濁した言葉をルシファーは理解していた。

勝てないかもしれない……殺されるかもしれない……。

そういつた不安はこの十年の修行で得た力をもつてしても、拭い去れる類の物ではなかった。

「わかつているさ。……それでも俺は行かなくちゃならない。」

食事の席を重苦しい雰囲気が漂う。

「そう……ですね。トウイーニーめは坊ちやまにお仕えた時から、いずれ離れる事を……覚悟しておりました。ですが……いざそうなつてみるとこれ程悲しい事とは……思いもしませんでしたよ。」

トウイーニーはやや言葉につまりながら話を続けた。

「それでも涙をしまい……見送るのが私の務めでもありませんようか。」

トウイーニーの頬を一筋の涙が零れ落ちる。

しかしその顔は美しき 妖精族 の乙女の満面の笑顔に満ちていた。

「今までありがとう……。その左目の傷に固く誓おう。必ずやこの家に舞い戻り、勝利の報告と魔族の再興を宣言すると。」

「……はい。坊ちやまも……ご立派になりましたね。」

ボソツと呟いたトウイーニーの声をルシファーはあえて無視した。
(結局最後まで『坊ちやま』か。)

この十年間変わらない二人の主人と執事、師匠と弟子という関係は今日で終わりを迎える。

今日をもつてその関係は、旅立つ者と帰りを待つ者になる。

余韻を楽しむかのように二人は最後の朝食を楽しんだ。

「そうれはそうと……坊ちやま達はこれからどちらへ？まさかいきなり勇者を探すという訳でもありませんでしょう？」

ルシファーにはいくつか候補があったが、中でも一番危険の少ない選択肢を選んでいた。

「まずは ゴルジディアン森 の前線支援基地を攻めようと思う。そこから一番近い ゴルジディアン山脈 の地下城に赴き、ゴブリン王に会う。」

「なるほど……。してその後は？」

「順々に大陸を巡り 六王 に協力を要請したい。勇者が魔族の地を離れている以上、まずは極東の魔王城、ひいてはその先の メルボー大橋 を越えない事には話にならない。それには 六王 の力が必要になるだろう？」

サタンの死後、魔族は混乱した。

元々一枚岩でなかった魔族は魔王という象徴的な権威を置くことでお互いの利権争いに終止符を打った。

それは数千年もの間変わらない常であり、それが次代の魔王を指名せずに突如没するなど考えられないことであつた。

それが突如現れた勇者によってサタンは討たれ、押し寄せた人間の軍勢によって人間への防衛線であつた メルボー大橋 を越えられるという事態を起こした。

元来魔族達が度々繰り返された 聖戦 に勝利出来た理由がこのメルボー大橋 の存在であつた。

圧倒的能力差は勿論だが、メルボー大橋 を越える事は人間の領地との間にある 死の谷 を越える唯一の術であつた。

数に勝る人間がいくら大軍を率いて押し寄せようと、唯一つの橋を一度に渡れる人数は限られる。

魔族は橋を使って大規模戦闘を避けてしまえば、あとは能力の勝る魔族が少しずつ人間を殲滅していけば良い話だつた。

それがどこからともなく魔王城に現れサタンを討ち、メルボー大橋を内から攻められるなどという事は誰も思いつかなかつた。

そこに人間の大量軍が押し寄せられてはいくら能力に勝る魔族もひとたまりもなく、メルボー大橋の陥落を許すことになった。

最大の防衛拠点の消失、指揮系統最高権力の喪失、情報の錯綜は大きな混乱を生み、結果 六王 はそれぞれの領地を自らの兵によ

つて自力で防衛せざるをえなかった。

なんとか大陸の極東部分を失う程度で人間の侵略を留める事に成功したが、その後の 六王 は互いに残された利権を争い対立しているというのが現状であった。

「おっしやる通りです。しかし……坊ちやまが急に赴いたところで六王 がすんなりと服従するとは思えません。」

確かにトウイーニーの言うとおりであった。

魔族に出回った情報によれば、魔王城の住人は衛兵のみならず使用人や牛馬まで皆殺しにされたとなっている。

当然ルシファーも死んだと考えられている。

そんな中、魔王子を名乗る青年が現れたところで 六王 がおいそれと従うはずがない

「そうならば力づくで従えるまで、と考えているが？」

「それではなんの意味もありませんよ。力で従えた者たちがいざという時裏切ったり、或いは意気消沈としたりする事はよくある事です。」

またしてもトウイーニーの言うとおりであった。

しかし今のルシファーには自らの正統性を主張する術がない。

「ではどうしろと？」

「私めはこの十年間、坊ちやまに隠れてあるお方を捜しておりまして。」

「あるお方？」

確かにトウイーニーは日々の合間を縫って家を空けることがあった。

「サンジェルマン公爵です。」

魔族の爵位で言えば 六王 は一番上の大公に位置する。

その一つ下に位置するのが公爵で、 六王 に次ぐ権力者である事を意味していた。

「聞かない名だ。」

ルシファーは十年もの間、身の安全を守るため身分を隠して生活

してきた。

さらに魔王城にいた時は若干八歳であり宮廷の爵位持ちの名前など知る由もなかった。

「サンジェルマン公爵はサタン様のご学友です。吸血鬼族の長にして嘗てはサタン様とも肩を並べた名手。必ずやルシファー様の力になってくれるはずです。」

吸血鬼族 は魔族でも魔人族に並ぶとも劣らない魔力の持ち主として名高い一族であった。

その一族の長たるものの協力をもつてすれば、六王にルシファーの正統性を示す事も不可能ではない。

「なるほど……それほどの者ならば。して……居場所は？」

「モンスローン山道 を ウインビーンの森 へ抜けます。森を北に三里ほど行ったところにひっそりと佇む屋敷があります。今はそこにいらっしゃるといふ情報を入手しました。」

「今は……というと？」

「サンジェルマン公爵は非常に気まぐれというか……変わった方で、数年に一度お住まいを変えられるんです。それで居場所を掴むのに随分かかってしまいました。」

（それならば今もじつとしている保証はない……ということになるか。）

「ただ……その……。」

「なんだ？」

「とーっても、とーっても変わった方ですので……お氣をつけてください。」

心なしかトウイーニーの顔色が青褪めているように見える。

「その……サンジェルマン公爵と……何かあったのか？」

「なんでもありません！」

あからさまにその間に何かがあった事を示す反応であったが、ルシファーは敢えて深く聞く事を遠慮した。

青褪めた表情を浮かべ、細い腕には鳥肌が立っている……これは

深く聞くべき話ではないと判断した。

「そうか……。兎も角 モンスローン山道 を抜けると言う事は、最初に向かうのは当初の予定通り ゴルジディアンの森 か。そうと決まれば、急いだほうがいいな。」

「そうですね。あの方がいつまでも留まってくださると思えませんし。」

トウイーニーもだんだんと落ち着きを取り戻し、普段の冷静な顔になってきた。

「さあ、坊ちやま！残りを食べてしましましょう。」

すっかり会話に夢中になり朝食に手をつける事を止めていた二人は、再び皿に手を伸ばすと最後の朝食を味わった。

その様子はまるで歳の離れた兄弟のようであり、仲の良い親子のようでもあった。

カーテンから朝陽が射し込む。

その光が照らすのがルシファアの明るい未来か、はたまた終焉への導きかは誰にも知りえない。

それでも彼はその命を賭して進むしかなかった。

それがこの十年間変わることのない、彼の決意の行く方向なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5383y/>

魔王子復讐記

2011年11月21日17時24分発行